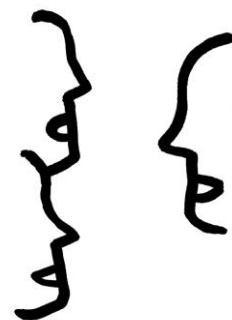


二月のテーマ

口(くち)



え・浅妻健司

心根は口に出る

口 にまつわる諺(ことわざ)や
故事成語は多くあります。

たとえば「天に口無し、人を以つて言わしむ」という諺をご存じでしょうか。「天には口がないので、その意志(天意)は人の口をもつて告げられる」という意味で、われわれが学ぶ純粹倫理の七つの原理の一つ、「全一統体」にも一脈通じるでしょう。

全一統体とは、人や物や自然などあらゆる事象や現象は、一見無関係のようでも、目に見えない奥深い次元でつながりを持ち、相互に連携して一つに統合されていると教えるもので、純粹倫理の根本的な原理を指します。

諺に限らず、「口」に関する言葉が枚挙にいとまがないほど多くあるのは、体の中でもそれだけ卑近で、欠かせない部位だからでしょう。思えば私たちは、一日たりとも口の世話にならない日はありません。食べることは口から始まり、日々言葉を交わして生活を営んでいます。

言葉を交わすことについて、倫

理研究所の二代目理事長・丸山竹秋は、「よいことの実行を語ろう」という原稿を遺しました。

前号の「今週の倫理」でも紹介しましたが、興味深い点は、己の善行を、時には進んで「語る」とを薦めている点です。自慢や偉ぶるような気持ちで語るとは自戒すべきだとした上で、「己の善行を進んで報告することも必要」と主張しています。

その事由は、「良いことをした。人に打ち明けたい」と思っているから我慢することの不自然さにあります。そうした我慢がうぬぼれを生み、やがて偉そうな心、強情な心にも転じるから戒めるべきだというわけです。

自分のしたことを聞いていただき、「それがもし人様のため、世の中のために参考になるのであれば、どうぞよろしく願います」と祈るような心で報告することは、その人自身を高めるだけでなく、聞いた人の実践のきっかけともなります。その両者が増えることが社会にとって有益だという趣

旨で書かれたものでした。

この原稿は今から四十年以上前に書かれたものですが、現在の倫理法人会活動にあてはめれば、「経営者モーニングセミナー」の会員スピーチ、「経営者の集い」や「倫理経営講演会」の事業体験報告に相当するでしょう。

これらのスピーチや報告は、一つの実践でもあります。己の善行を人に話すトレーニングです。

己の善行に対して(これは自分の力でやったのではない。周囲からの助けや天のお陰でチャンスを与えていただいたのだ。ありがたいことだ)と、自然に謙虚な心根になれるまで実践を続けたとき、人や物を引きつける魅力的な品格となつて外に表われるでしょう。

とりわけ口や口元には、その人の人生や品格が表われるものです。その人の見えない心根は、言葉となつて口から表われます。

己の品格が高まることに比例するように、家族や社員にも影響が及び、薫化となつて、家風や社風がより良く高まつていくのです。